水明インターネット句会（選句・選評）　令和六年三月

1	武史	マシュマロの適量知らず春の泥	食いしん坊の娘（小学6年生）が共感した句。正直私は意味が分からなかった。娘曰くマシュマロの食べる適正量が分からないらしい。	太田怒忘
2	暦文	大原の坂の二軒目花山葵		ことは
3	素風 破れ蓮	重畳として早緑の山笑ふ	春の山の風景がよく表現されていると思います。　季語が効いていると思いました。	安田蝸牛
4	たか子	ふるさとの母と眺めしひな祭り	カラコロカラのオノマトペと春一番の取り合わせがとても良い。今は亡き母と推察します。今雛を眺めていると往時の母との楽しかった雛祭りを思い出しその感慨に浸っているところです。	明陶家
5	久夫 幹子	妻しのぶ長き睫毛の女雛かな	奥様を慕われている様子がよくわかり感動しました。雛人形を見て、奥様と重ね合わせしみじみとなさったのですね。心情が伝わって来ました。	森　佳月
6		障子あけ雛に見せてる雪景色		ありぎりす
7	葉士 凡士 鶴城	いじめっ子にあっかんべえして卒業す	積年の恨みを「あっかんべ」に込める顔が目に浮かぶ。面白い句、中学でまた同じクラスになったりして。ユーモラスな句作りの妙。	西村青夏
8	順一	春月や黄身をつぶして卵吸ふ	所謂生卵を加工せずに飲むと言うやつで、ふとロッキー1のトレーニング場面を思い浮かべたのですが、この句では「春月」と言う季語なので、黄身をつぶさなかったのでしょう。	網野月を
9		初蝶や九段坂下レストラン		ひろ志
10		母といて幸せを摘むたら芽かな		高原ひろし
11	蝸牛 破れ蓮	鶴守の視線の先に鶴引けり	鶴守の温かい視線を感じる。世話を終えてホッとする鶴守の姿がやさしい。	松田素風
12	佳月 鶴城	春まけて過去を予習す学生よ	また1年頑張らねばと。過去を予習が上手いですね。過去を予習する措辞が最高。	永栄
13	風子	紅梅の千年のいろ肩車	雅と俗の取合わせが秀逸。	新井のり子
14		在りし日の話題尽き無し春座敷		青木鶴城
15		鳩独り地虫出でたか啄めり		雪待月田猫

水明インターネット句会（選句・選評）　令和六年三月

16	陸人	好きな子に恋人をりぬ椿落つ 田でなくなった所も季節が巡り青々とした野にかえっていく、自然の生命力と同時に過去の感慨も。	小林陸人
17	みづる	草青む野に還りたる捨田かな 弟への気持ちが伝わる。	邦治
18	のり子	返事して立つ卒業の弟（おとと）かな 抱えている子猫に対し、「今日から此処が君の家だよ」と言っている作者のやさしい人柄が伝わってくる。猫を飼った経験のあるすべての人が共感できる句です。今日から加わる「猫の子」に「君の家」だよと語りかけ、家族として接しているのが微笑ましいですね。	風信子
19	陸人 田猫	猫の子よ今日より此処が君の家	渡邊古城
20		弊社には日永は遂に訪れず 水を掛けると幸いを下さるという地蔵様。願いは聞くが、折からの寒さで辛くもあるのだ。ユーモアが楽しい。高野山の奥之院の景が浮かびました。寒い冬の朝、つららが地蔵の耳から下がっているところに目を付けた作者の視点が素晴らしい。氷柱の耳飾り。鼻だったら・・とか想像が膨らむ。	齋藤鍵子
21	マスミ 走吟 たか子 ありぎりす	水かけの地蔵つららを耳に下げ 梅一輪の開花にも、希望を持ちたくなる気持ちよくわかります。梅の花に願い託している心情に同感！！梅一輪に作者の希望が託されいる。早く良くなるといいですね。	衛
22	マスミ あき 朝香	梅一輪咲き寛解を信じをり	幸子
23	蝸牛	閼伽井より汲み上ぐ水の温みけり 彼岸の頃の墓参であろうか、実感句だと感じた。	破れ蓮
24	久夫　みづる 音思　ありぎりす ゆりあ 佳月 ひろ志 風舎	磯菜摘む能登は海より目覚めけり 能登の復興を願いその第一歩にふさわしい名句だと思いました。震災に遭われた能登の方々の生活再建を祈る気持ちが感じられます。能登が彷彿としてきます…。一刻も早い回復を。季語「磯菜摘」は磯の岩などに付く食用の海藻を摘みとること、能登の海が暖かくなり復興への意気込みも加味して女たちの作業が始まった。「海より目覚めけり」がいい。中七下五に深さを感じる。北陸の春の訪れが待たれる。海より明けるの措辞が見事です。	河野凡士
25	しんい	春の川うねりに沿ってうねる畑 リフレインが巧み。	しーしー
26	一葉 京子 幹子	アラームが夢の隣で鳴る朝寝 「夢の中」でなく「夢の隣」という措辞で季語が引き立った。「夢の隣」の表現に魅力を感じる。私もこんな経験があります。「夢の隣で」と言う表現が上手いと思いました。	本橋稀香
27		熱燗やほろ酔い夫の持て話	和田イチ子
28	風舎	行く雁や発車メロディはフォルテシモ 帰雁の一群の懸命な姿が浮かんでくる。	光雲2
29		春霞お地蔵様のならぶ朝	石関六弦
30		五階まで届かず消えた石鹸玉	山川充

水明インターネット句会（選句・選評）　令和六年三月

31
屋根すべる音で目覚むる春の雪
渋谷きいち

32
山菜
走吟
あき
六弦
順一
ありぎりす
父の手は農具のひとつ山笑ふ
父の手を農具のひとつだなんて、なんて諧謔、親不孝！ほのぼの感が何とも麗しく。よく働いく父の手に感謝・・。人の手が作り出すものは暖かいです。すごいですね、鍬や鋤が必要ないのかもしれません。沢山の苗をその手で植えてしまうのでしょう。父の手は農具と一体であると。農と父へのリスペクトを感じます。
荒一葉

33
のり子
健気さを秘めて雪割草ふふむ
こういう賛美もありかあ。
後藤允孝

34
蝸牛
現世か常世か今朝の一霞
一面の霞の幻想的な様が窺える。
薫風

35
春風に背中押されて初歩き
伯男

36
春霰地面たたきて走り行き
ゆりあ

37
歩道橋運ぶトラック鳥雲に
森下山菜

38
稀香
送辞にも負けて副将卒業す
試合にも負け送辞にも涙ぐむ泣き虫の副将がほほえましい。
新　暦文

39
寒立馬
巣立つ朝小さくなったランドセル
共感がわく、買ってやったのはジイジかな。
徳田武史

40
鎮魂の海ゆるがして春北風
しんい

41
あき
伯男
霜里
忘
怒
鍬入らば匂ひ返すや春の土
春の土の匂いを渇望している私である。春の匂いが良いね。土の香りに接する機会も減りました。生き物たちが目を覚まし、太陽が長く暖かに照り、ほくほくとしていく春の土に匂いがあることを想像できました。土に鋤を入れると、土の匂いが身体に浸み込んでいく気持ちよさを感じます。
俳爺

42
ひろし
山菜
青空に制帽を投げ卒業す
卒業のうれしさよ、晴れがましさよ、そういう時代がありまして。
佐藤蓮花

43
幼げな卒業袴二尺袖
総太郎

44
風光る都電一日乗車
丸山マスミ

45
風光る小川に遊ぶ足白し
後記朝香

水明インターネット句会（選句・選評）　令和六年三月

46		流氷の押し合ひ圧し合ひ叫ぶ声	反町修
47	朝香	菜の花の黄色とスニーカーの白が美しい。春の躍動感が溢れている。 菜の花や駆けゆく白のスニーカー	立野音思
48		春の日の福は横丁伊勢うどん	秋谷風舎
49	凡士	さあツーリングの季節が来た。 春立つやブァオンとバイクひと吹かし	龍野ひろし
50	音思 霜里	ここちよい春の一日を感じさせる句です。歩くのが楽しい季節ですね。 風光るもひとつ歩くバス区間	小林土璃
51	のり子 きいち	雨の滴を「重さ」で美しく表現されている。雨の重さで降った時間が分かる？馬酔木の花を軽くして、作者の優しさが良い。 ふれてみる雨の重さの花馬酔木	やぶつばき
52		珈琲を入れて寝落ちや春日向	横井あらか
53		彼岸まで続く寒さに落ち着かず	あき
54	ことは	風車とのつかず離れずの距離感がいい感じです。 良く知恵の廻るこどもや風車	小林京子
55	幹子	店先に古書を並べている神田古書街街が浮かびました。春疾風は砂埃を連れて来ますね。 春疾風砂触りする古書を買い	霜里
56	高原 ゆりあ	雨月物語ですね、素敵な句に感激。 しおり抜き雨月の語り余寒かな	絵夢
57	允孝 やぶつばき 絵夢	白鳥の旅立ちの朝の光景、白鳥の一声が清々しいですね。景が目の前に浮かびます。清冽な映像として印象的。 明けの湖白鳥ひと声旅立ちぬ	倉田詩子
58	高原 暦文 鶴城	春の雪の色んな顛末を見事に言葉をそぎ落とした句。 顛末も一語にすれば春の雪	みづる
59	武史	恐らく同年代の方の作品。人によっては全てのボタンがなくなってたが私のボタンは全て残ってた記憶が蘇る（笑）。 卒業も第二ボタンの旅立てず	平野久夫
60		認知症検査合格夫の春	羽島秀子

水明インターネット句会（選句・選評）　令和六年三月

61		酒交わす無沙汰の友と春炬燵	寒立馬
62		ラッパ水仙眠る子抱いてパパの行く	佐藤幹子
63	しんい 伯男 怒忘 みづる	菜の花やゆっくり走る一両車 いすみ線が目に浮かびました。田舎の長閑な光景。菜の花と一両電車の取り合わせから、ほがからかな春を感じます。絵が浮かびます。春の長閑さそのもの、車窓から入る菜花の香りまで感じられる。	岡本たか子
64	璃香 土稀 ひろ志 六弦 絵夢	思ひ出を筒に巻き込み卒業す 筒は思い出を入れるものだったのか。着想が新鮮。筒に巻き込むの表現が上手い。卒業証書と共に喜怒哀楽の思い出は筒に納め、進学にしろ就職にしろ、次のステップへ大きく躍進です。中七に卒業の心情がよく現れていますね。将来卒業証書を開くと思い出があふれて出てくる光景が浮かぶ。	中島走吟
65		朝食はクロワッサンと花ミモザ	染谷風子
66		ミモザ咲き抜け道あるかと足伸ばし	石川順一
67	音思	漬け物を添へて馳走や蜆汁 一汁一菜ながら季節ならでは味に満ち足りた食事であったことをうまく表現されています。	ことは
68	俳爺 薫風	小夜荒れて地に満目の落椿 中七の詠みぶりに惚れました。満目という措辞が効果的だと思います。	安田蝸牛
69		路地裏の出窓の象の腰の萌	太田怒忘
70		ラッタッタラッタッタと来る春の波	森　佳月
71		冬草や利休館という空き地	ありぎりす
72		庭先の新芽気にかけて車庫入れし	明陶家
73		キリストや水平作る赤ワイン	網野月を
74	佳月	子より親妻より夫（つま）に春の風邪 しあわせの証拠です。	ひろ志
75	秀子 あらか	蛇穴を出て俳人と目が合ひぬ 俳人を取り合わせたのが面白い。俳人は蛇穴の前で待っていたのかも。漫画チックな光景がありありと想像できて愉快です。	西村青夏

水明インターネット句会（選句・選評）　令和六年三月

76	光雲 修2 薫風 暦文 しーしー 田猫	光芒の洩るる雲間に鳥帰る この季節に見れるのは幸運の前兆？リズムがよく光景がはっきり浮かぶ。「鳥雲に入る」が絵として浮かびます。天使のはしごに向かって、ですね。目を閉じれば鮮やかに情景が浮かびます。「光芒の洩るる」という言葉選びも絶妙。厳かな気持ちになれる、綺麗な句です。門出と引越しの季節にも相応しいと思います。	松田素風
77		薬降るビルの間のフィクション	永栄
78		大鳥居の視野に初蝶ふと浮かむ	高原ひろし
79	京子 絵夢	ものの芽や旬を彩るシェフの指 ものの芽とシェフの指の繊細な動きの取り合わせが良い。丹精込めたシェフの料理がおいしそう。	青木鶴城
80		マスク取り曇天の草芳しき	雪待月田猫
81		しやかりきに蒲公英咲くや記念の日	新井のり子
82	陸人 霜里	春疾風帽子も我も走るなり 道を転がる帽子ってなぜあんなに速いの？	邦治
83		三男の就職祝ふ花見かな	風信子
84		猫の子を家族に迎へ写真撮る	小林陸人
85	破れ蓮	凍て反る最終電車去るホーム 季語が人気の無くなったプラットホームにマッチする。	齋藤鍵子
86		草餅を食べるひ孫や膝の上	渡邊古城
87	しんい 允孝 やぶつばき	サイホンの滴りを待つ春うらら 至福のひととき。コーヒーの最後の滴りまで待っている間が、どことなく春うららですね。季語「春うらら」が良いですね。幸せなひと時ですね！	衛
88	修 たか子	空き缶のカラコロカラと春一番 中七のオノマトペが秀逸。	幸子
89	ひろ 允孝し 秀子 走吟 やぶつばき 田猫 風子	牧開き十勝は空を解き放ち 十勝の春はまだまだ寒そうですが、牧場が開けば暖かい春はもう直ぐですね。雄大な牧場の春ですね。大きな景の一句。季語の雰囲気がよく出ていて気持ちよいです。リズム感もよく、「十勝」「解き放ち」と韻を踏むと同時に、北海道の雄大な大地の広がりをよく表現しています。草を食む牛たちも幸せそうです。待望の春の到来、中七下五のフレーズが秀逸。	河野凡士
90	俳爺 風舎	トラクターのタイヤのはざま蓬萌ゆ タイヤの狭間に蓬とは見立てが良い。農作業の傍ら、小さな春を見つけた。「タイヤのはざまの蓬」とは、観察が優れる。	しーしー

水明インターネット句会（選句・選評）　令和六年三月

91	土璃 素風 マスミ 薫風	北を指し引鴨の陣揺るがざる 「揺るがざる」が全体を引き締めている。悠久の逞しさを感じる。鴨の群れ飛ぶ姿が目に浮かびます。北を指して帰る鴨の群れ。長く厳しい旅である。それに耐えて生き抜く命の威厳が「揺るがざる」から読み取れる。無事であれと願わずにはいられない。	破れ蓮
92	光雲2	牡丹雪季節移ろう諏訪の風 諏訪湖の風と牡丹雪の取り合わせが素敵。	和田イチ子
93		身悶えし白魚哀し滚る釜	光雲2
94	高原 しーしー	ウィンクの男近づく霾ぐもり 季語があやしい雰囲気を醸してます。	本橋稀香
95	土璃	うららけし偵察蜂の家探し 必死の「偵察蜂」と「うららけし」の対比が面白い。	山川充
96	稀香	春耕の八分がお茶で二分が鍬 リズムが良く春耕の楽しさが伝わる。	渋谷きいち
97		歩く場もなき六畳間雛納め	石関六弦
98	寒立馬	じゃうじゃうと焼蛤の叫びかな このオナマトペを見つけたセンスの勝利。	後藤允孝
99	素風	情念の色を湛ふる紅椿 紅椿をうまく表現している。	薫風
100	きいち 朝香 寒立馬	ものの芽のほぐるる気配今朝の雨 ほぐるるが良い。雨が優しく目覚めさせてくれるんですね。句全体で春の訪れが感じられる。上五と中七の措辞が秀逸。１７音で表す風景、春の到来が浮かび見事。	荒一葉
101		主亡くて古りし絵屏風向うむき	ゆりあ
102		漱石は生まれかはりて犬ふぐり	森下山菜
103		生かされて今日の佳き日に鳥帰る	伯男
104	あらか	口ずさむなつかし校歌巣立つ子と 親子夫々の卒業式が二重写になっている映像が思い浮かびました。	徳田武史
105	ひろし ことは 秀子 武史 ひろ志 怒忘	濃紺のスーツの折り目風光る 颯爽とした新入社員の姿が浮かびました。牧開きの十勝の真っ青な空が思い浮かびます。これから社会に出る大きな期待と小さな不安が感じられる句です。昔を思い出します。新調のネイビースーツでの初出勤か初登校か、若者の輝く喜びや希望が見えるようだ。卒業式か入学式か。はたまた入社式か。新しいスーツを下ろし、式典にのぞむ、新たな生活のスタートを感じさせます。「スーツの折り目」としたあたりに、新生活への緊張が出ていると思います。期待と緊張を想像できる一句だと思いました。	新　暦文

水明インターネット句会（選句・選評）　令和六年三月

106	一葉 きいち	風立ちて芽柳揺るる銀座かな 「銀座の柳」にも春の風が心地よい。リズム良く、銀ブラの楽しさが出でる。	俳爺
107		春雪や上野十八番ホームを偲ぶ	佐藤蓮花
108		崩れたる土砂へふんはり春の雪	しんい
109	光雲2 山菜	回転ドア開くれば花の甃 いしだたみに散り敷くさくらの景色が浮かぶ。漢和中辞典を久しぶりに開かせていただきました。ありがとう。	丸山マスミ
110	ゆりあ	カプチーノの泡見つめをり春憂ひ 下五が良いです。	後記朝香
111		零れ種庭の周りの菜の花よ	総太郎
112		花冷えや鳥の骸を葬りけり	立野音思
113		噛んで食ふけんちんそばや春浅し	秋谷風舎
114	六弦	何となく家族集まる春炬燵 この「何となく」がいい。	反町修
115	順一	永き日のエレベーターはよくしゃべり 「永き日」と言って居るので、エレベーター自体がシースルーみたいな、外の日を取り込めるような、そんなエレベーターだったのかもしれません。	小林土璃
116	凡士	ほどけゆく紅茶葉窓に牡丹雪 早春の午後のひととき、たゆたう感がよくでている。	やぶつばき
117	俳爺	花街の町家格子や朧月 物語のイントロのような詠み。	龍野ひろし
118		春曇りめまい覚えし窓越しに	あき
119		お地蔵様の耳は福耳日永かな	小林京子
120	伯男	吟行や靴にたっぷり春の泥 「たっぷり」がよくきいています。	横井あらか

水明インターネット句会（選句・選評）　令和六年三月

121　絵夢
乙女らの微笑みの色花と化す

122　倉田詩子　総太郎
老梅の名残の花や清々し
私の団地でも良く見かける光景です。うまく表現されていると思いました。

123　霜里　しーしー　風子
足下に空のかけらのイヌフグリ
さわやかでいさぎよい句。いぬふぐりの青を空のかけらと見立てた所が秀逸。

124　平野久夫
しじみじる五臓六腑にしみわたる

125　みづる
春光を透ける靴下足早に

126　寒立馬
わら沓や故郷に過去母ありて

127　佐藤幹子　久夫
買い物のつい立ち話日永かな
季語にぴったりユーモアたっぷりのお気に入りの句です。

128　羽島秀子　総太郎
認知症検査合格夫の春

129　中島走吟　あらか　修
春雨や相合傘を躊躇はず
春雨なのに濡れて行こうとしない、気取らない二人を想像しました。春雨と相合傘の取合せがぴったり。

130　染谷風子　ことは　京子
揚雲雀そこからガザが見えますか
口語調の語りにより重いテーマをさらりと表現しています。時事句。縄張り宣言する、人も雲雀も。

131　岡本たか子
屏風絵の山よりきこゆ春の声

132　石川順一
春炬燵足を伸ばせば想が湧き

今月も不手際で同じ句がダブってしまいました。お詫びの上、掲載漏れの句を紹介いたします。とても素晴らしい句でした。

羽島秀子
雛残し嫁ぐ娘に明日あれと